

# 知の成長と学システムの自己準拠性

文学部社会学専攻 教授 森川剛光 もりかわたけみつ

縁あって文学部社会学専攻の教授を拝命し、本年4月に着任した。私がドイツ学術交流会(DAAD)の奨学金を得て、カッセル大学に留学したのが1997年だから21年目にして三田の山に戻ってきたことになる。当時お世話になった、教授だった先生方はほぼ亡くなられ、若手だった方々が教授として定年間際、自分も鏡を見ると白髪だらけ、浦島太郎の気持ちにならざるを得ない。晋の文公の亡命生活は19年だったが、私の足かけ21年(01〜04年は日本に拠点を置いていたので正味18年強)の海外生活は文公並み、これだけ長期間海外の大学に籍を置き、スイスでの教授資格(Habilitation)どころか、ドイツ、オーストリア、スイスと独語圏のすべての国で教歴のある同僚は一人もおるまい。

長年海外の大学で活動してくると、日本の大学に違和感を感じるのも事実だ。大学再編を巡る議論や文学部の学問は「教養知」であるという理解もそうだ。しかし、大学というものはそもそも専門的知識の産出を社会から委託された機関であり、本来ディシプリンによる差異はない。社会学者、文学研究者、歴史研究者、文化研究者も新しい知識を産出するには長期の専門的訓練が必要であり、論文として発表される新知識は専門知識を欠いた素人には理解できないものである。そして博士学位をもった「専門家」の産出する知識を政治、経済、教育など社会の他の部分システムが、いつ、どのように利用するかは、まったく二次的なことである。このような(科)学システムの閉鎖性≡自己準拠性なしには、長期的な知の成長、蓄積は不可能である。直接にメディア、政治に関わり、世論と若者を導きたいという誘惑も、すぐに儲けになる研究をしるという要求も共に間違っていると思う。

かつて寺尾誠先生(経済史)は、日本の研究者に足りないのは、専門に閉じたこもる勇氣であると言われていた。ドイツで長期間研究に従事した後では、先生の言われたことの意味がなんとなく分かったような気がする。社会から隔絶することによってのみ、社会に貢献できることもあるのだ。



最初の留学先のカッセル大学(ドイツ)

談話室

教員によるエッセイコーナー